

【FGO10周年記念作品】

堅物所長のオルガマリー・アニムスフィアは クソ雑魚オマンコをマスターにハメ潰され 種付けアクメに溺れながらお嫁さんになる

部屋の中には白磁のソーサーとティーカップが当たる小気味の良い音が響いており、柑橘系の紅茶特有の芳醇でありながらフルーティーな香りが微かに漂っていた。机を挟みながら対面するように椅子に座っている黒髪の青年——”藤丸 立香”と銀髪の左側を三つ編みにしている美女——”オルガマリー・アニムスフィア”は、紅茶特有の苦味とお菓子の甘味を楽しむ心地の良いティータイムを堪能している。

「——ずず……っ、ふう——っ。今日も美味しいわね。このフィナンシェとも良く合ってるわ」
「ありがとう。フィナンシェはタマモキャットが『作り過ぎちゃったからご主人にあげるぞっ』てくれたんだ」

「そうなのね。後で私の方からお礼を言っておくわ」

「うん、タマモキャットも喜んでくれると思うよ」

オルガマリーは所長と職員という関係であるのにも関わらず、お友達のような感覚でマスターと共にお茶をすることに対して否定的であった。だが、紅茶や珈琲を淹れるのが上手くて人誑しの権化のような性格をしているマスターに少しずつ懐柔されていき、ツンツンしていた彼女の態度も軟化していったのである。

気付けば休憩時のティータイムは二人の中で習慣となり、オルガマリーはマスターの部屋に足繁く通うようになっていた。

「もう一杯飲む？」

「ありがとう、貰うわ」

普段のオルガマリーのことを知っていれば知っている人ほど、穏やかな表情と雰囲気柔らかさに驚いてしまうだろう。

オルガマリー・アニムスフィアという人物は基本的に責任感の塊であり、それ故に自分にも他人にも厳しく人から嫌われやすいという損な性格をしている。常に余裕が無さそうで言葉の端々に棘が含まれたキツイ言動をしている彼女だが、それさえマスターは優しく受け止めたことで肩の力を抜いても良い居場所になったのだ。

透き通った琥珀色をしている紅茶によって出来ている水面には、オルガマリーの美貌が鏡のように映し出されている。自分でも驚いてしまう位に穏やかな笑みを浮かべている水面を彼女は

ぼーっと見つめながら、人理保障機関カルデアでマスターと初めて出会った時のことを思い出していた。

「……本当は初対面なのに目の前で寝るような人嫌いだったわ」

「ごほ——っ、んっ。あっ、あの時はシミュレーションの影響っ」

突然のオルガマリーの発言によって紅茶が気管に入ってしまったマスターは、口元を右手で覆いながらゴホゴホと咽せてしまう。そして、シミュレーションの負荷による影響だったことを慌てて説明しようとする彼に対して、揶揄うつもりだったことを伝えるように彼女はクスクスと笑みを浮かべたのである。

「ふふふっ、今なら分かるわよ。あなたがそんな不真面目な人間じゃないって」

「そっ、そっか。良かったあ……」

胸を撫で下ろしているマスターの姿を見詰めるオルガマリーは、現在の彼に対しての想いを口にするのであった。

「今のちゃんと朝礼を聞いてくれるようになったあなたのことは好きよ。……それに紅茶を淹れるのも上手だし」

「俺も厳しいけどいつも真剣なマリー所長のことが好きだよ」

「——っっ♡♡♡ はっ、恥ずかしいから止めなさい……っ♡♡」

照れ隠して紅茶が淹れるのが上手いと誤魔化しながらの好きというオルガマリーからの言葉に対して、マスターも彼女のことが好きであることを伝えたのである。予想外の反撃を受けたオルガマリーは頬を染めながら止めようとするのだが、彼は追撃するように更に具体的に思っていることを口にすることだ。

「不測の事態になるとヒステリックになったり、プライドが高くていつも素直になれない」

「ちょっ、ちょっどっ！ 私のことそんな風に思ってたのっ!？」

「でも、本当は寂しがり屋で気が小さくて臆病な所もある」

「うう……っ、確かにそうだけど。そこまで言わなくても良いじゃない……っ」

芯を捉えるように心当たりのある自分の駄目な部分を指摘されたオルガマリーは、動揺しながら声がか細くなってしまいうちに落ち込んでしまう。だが、マスターは負の部分を含めて彼女のこ

とを受け入れているということの証であり、本当に好意があるということを言葉として紡いでいくのである。

「それでも自身の欠点から目を背けたりしないのも知ってる。今も所長としての責任を全うしようと頑張ってるよね。頑張り屋さんで強い責任感があって、本当は優しい所が好きだ……愛してる」

「~~~~っッ?! !♡♡♡♡ あッ♡♡ そっ、そのっ♡♡♡ いきなり……っ♡♡」

真っ直ぐ相手の顔を見詰めながらのマスターからの愛の告白を受け、オルガマリーは驚きと恥ずかしさから視線を逸らしてまともな言葉すら発せなくなっていた。席から立ち上がった彼は歩み寄りながら屈むことで顔を近付け、動揺してトパーズ色の瞳を揺らしている彼女からの告白の返答を聞き出す。

「俺はマリー所長のことが異性として好きですけど、マリー所長は俺のこと異性としてどう思ってますか？」

「そっ、それは——っッ♡♡♡ すっ、すき……っ、てっ?! !♡♡ なっ、なんで言わなくちゃいけないのよっ!!♡♡♡♡ ぜっ、絶対に言わないんだから……っ♡♡」

動揺したまま自分の気持ちを話しそうになるオルガマリーだが、寸前の所で正気に戻ったのか絶対に口にしないと宣言したのである。しかし、所長と職員という関係であるのと共に現在の二人は”マスター”と”サーヴァント”であり、マスターは右手の甲に刻まれている盾を模した令呪を輝かせた。

「令呪を持って命じる。素直な気持ちを話せっ！」

「~~~~っッ`?! !♡♡♡♡ きょっ、強制しようとしても無駄よっ!♡♡ カルデアの令呪は頑張れば耐えられるんだからっ♡♡♡」

「——重ねて命じる。本心を口にしろっ!!」

「あ——っッ♡♡♡ すっ、すk……っ♡♡ んう` ~~~~~っッ`♡♡♡♡ れっ、令呪を無駄遣いするなあ`……っ♡♡♡」

ギリギリの所で我慢することが出来たオルガマリーであったが、令呪はあと一画だけだが残っている。使わないように阻止しようとしているが無駄な抵抗であり、止めを刺すようにマスターは最後の一画も消費してしまう。

「更に重ねて命じる。自分の気持ちに素直になれっ！」

「——っッ?!♡♡♡ もっ、もうっ♡♡ 好きっ♡♡♡ 好きよっ!♡♡ あなたのことが大好きですっ♡♡♡♡ はあ——っ♡♡ はあ……ッ♡♡♡ これで満足っ♡♡」

決壊してしまったダムのようにマスターの好意があることを口にしたオルガマリーは、半ば自棄を起こしながらも相思相愛であることに嬉しさと恥ずかしさを感じてしまっていた。

「相思相愛だって知れて満足です。それじゃあ改めて……俺の恋人になって欲しいです」

「~~~~っッ”♡♡♡♡ ほっ、本当に直球なんだから……っ♡♡ そっ、そのッ♡♡♡ よろしくお願ひします……っ♡♡」

こうして二人っ切りのティータイム中に恋人同士となり、マスターとオルガマリーは所長と所員、マスターとサーバント以上に親密な関係となったのである。

「”マリー”こっち向いて」

「いっ、いきなり呼び捨てっ♡♡ んむう~~~~っッ” ?!!♡♡♡♡」

突然の呼び捨てに驚いてオルガマリーが顔を上げた瞬間、マスターは彼女の瑞々しくぶるぶるの唇を奪ってしまう。ファーストキスを奪われたオルガマリーは両の瞳をカッと見開き、身体を強張らせたまま口内で悲鳴を上げた。

サーバントの腕力なら簡単に振り解くことが出来るのだが、オルガマリーは呼吸すらどうして良いか分からずに固まっている。

「んむっ♡♡ んッ♡ ちゅぷう……っ♡♡♡ ん” う” ——っ♡♡」

唇が押し当てられたまま擦れ合うことで水音が鳴っており、それが気持ち良さと恥ずかしさに拍車を掛けてしまう。実際には二人が口付けをしていたのは一分にも満たない短時間であったのだが、ファーストキスであったオルガマリーには瞬きのような一瞬にも永遠のようにも感じられた。

「んちゅう~~~~っ♡♡♡ んむ……っ♡♡ ぶはあ” ——っ♡♡♡ はあ” ……っ♡♡」

「ふう……っ、これから恋人らしいこと沢山しましょうか」

「~~~~っッ” ??!!!♡♡♡♡ はあ——っ♡♡ ふう” ッ♡♡♡ そっ、その……っ♡ ゆっくり段階を踏んでいきましょっ♡♡♡ あッ♡♡ んむう” ——ッ! ?♡♡♡」

こうして恋人関係となったマスターとオルガマリーは、紅茶の匂いで満たされた室内で愛情を確かめながら更に深め合う。

「——キスが甘酸っぱいって本当だったのね♡♡♡」

「それは紅茶のせいですよ。本当のキスの味を教えてください」

「ちょっ、ちょっとまだ慣れてないんだからっ♡♡ んむう……ッ♡♡♡ ちゅぷるるう～～っ♡♡」

その後も大人のキスの仕方まで覚え込まされたオルガマリーは、舌や唾液を絡ませ合う味までタップリと堪能することとなった。だが、彼女は頬を膨らませながら唇を軽く尖らせる可愛らしく不貞腐れた表情を浮かべながら、本人にしか聞こえないような声量で『やっぱり甘いわよ……っ♡♡』と口にしたのである。

いや——いや、いや、助けて、誰か助けて！ わた、わたし、こんなところで死にたくない！
だってまだ褒められてない……！ 誰も、わたしを認めてくれないじゃない……！
どうして！？ どうしてこんなコトばかりなの！？
誰もわたしを評価してくれなかった！ みんなわたしを嫌っていた！
やだ、やめて、いやいやいやいやいやいや……！ だってまだ何もしていない！

生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに——！

これはまだマスターとして未熟だった藤丸 立香に刻まれた大きな傷、特異点Fで伸ばしても手が届かなかったことをずっと後悔していた。そして、彼はもう二度とオルガマリーのことを離さな

いと心に決めており、誰にも認めて貰えなかったなんて悲しいことを言わせないように幸せにすると誓っていたのである。

「——あっ♡♡ んう……っ♡♡♡ いっ、いきなり抱き締めないでよっ♡♡」

「ごめん、ちょっとそういう気分だった……」

「どっ、どんな気分なのよっ♡♡♡ ふう……っ♡♡ ベっ、別に嫌じゃないけどっ♡♡♡」

普段通りマイルームへと訪れたオルガマリーであったが、正面から突然マスターに抱き締められたのだ。彼女は混乱しながらも広い背中に両腕を回しており、恋人という関係にも少しずつ慣れてきている証拠である。

抱き締めたことでオルガマリーの存在を感じて安心したマスターは、普段の調子を取り戻すことが出来たらしい。

「抱き締めたら安心したっ。ありがとう」

「そう……っ、あなたが安心したなら別に良いけどっ♡♡」

「あなたじゃなくて二人っ切りの時は名前と呼んで欲しいな」

「——っッ♡♡♡♡ りっ、立香……っ♡♡ これで満足っ♡♡」

「うん、嬉しいよ。マリー」

「~~~~っッ♡♡♡♡ 私ばかり恥ずかしい思いをしてるわ……っ♡♡」

基本的に初心であるオルガマリーはマスターに翻弄されており、普段の高飛車な態度とは裏腹に押しにとことん弱かった。彼はモデルのようにキュッと括れた細腰を両手で撫でながら、更に恥ずかしがっている彼女を引き出そうと囁く。

「恥ずかしがってるマリーは可愛いよ」

「んう` ~~~~~っ♡♡♡ そっ、そうやっていつも挿ちっ♡♡ 一応、私の方が年上なの
に♡♡♡♡ あ` ひ——っ♡♡♡ なっ、撫でるの反則っ♡♡」

「反応もとっても可愛いですよ。それに恋人同士なんですから、もっと過激なことも沢山するん
ですよ？」

「————っっ??!!!♡♡♡♡♡ まっ、まだ早いわよっ♡♡ そっ、それにっ！
♡♡♡ キスだって強引に教え込んだの許してないんだからっ♡♡♡♡」

エッチな話題から何とか逸らそうとするオルガマリーだが、可愛らしい彼女にもっと意地悪し
たくなってしまふマスターは囁き続ける。

「でも、あれから毎日欠かさずキスしてますよね？ 最近だとマリーからも舌を絡めてくれて、二
人で唾液の飲ませ合いっこもしてるのに」

「~~~~~っっ♡♡♡♡ そっ、それは……っ♡♡ 立香がそうするのが良いつて教えてた
からっ♡♡♡」

「俺は凄く嬉しいですよ。可愛くてエッチな彼女と毎日ディープキスしてるんですから」

「もっ、もう……っ♡♡♡ 今日は絶対にキスしないんだからっ♡♡」

自分の痴態を説明されたことでオルガマリーは耳の先端まで真っ赤に染め、抗議の意味を示す
ように額をグリグリとマスターの胸板に擦り付けていた。余計に彼女に対する愛おしいという気
持ちが増していく彼は、オルガマリーの美巨乳が自身の胸板に『むにゅうっ♡♡』と押し潰れて
しまう位に強く抱き締めたのである。

「あ——っ♡♡♡ そっ、そんなに強く抱き締めないでよ……っ♡♡ 動けないからっ
♡♡♡」

「マリーからキスしてくれたら弛めます」

「————っ♡♡♡♡ 今日はしないって言ったのに……っ♡♡ もうっ！♡♡♡ 立香は意
地悪よっ♡♡」

自分からキスをしないと離してくれないと察しているオルガマリーは、言葉では意地悪と口にし
ながら諦めたように爪先立ちになって顔を上げていく。そして、彼女は瞳を閉じながら瑞々しく
柔らかな唇を僅かに尖らせ、緊張と快感によって唇をプルプルと震わせながらマスターの唇に重ね
合わせた。

——ちゅうっ♡♡

「んむっ♡♡♡ ふう” ……っ♡♡ ちゅぷうッ♡♡ んちゅうっ♡ ふうーっ♡♡♡」

毎日タップリと深い口付けをしているためキスをするとスイッチが入ってしまい、オルガマリーは艶めかしい吐息を漏らしながらマスターに身体を預ける。唇を僅かに開いたり閉じたりを繰り返してピチャピチャと淫らな水音を立てており、小鳥が啄み合うような口付けを繰り返しながら唇の感触を堪能していた。

そして、二人はタイミングを合わせたかのように舌を伸ばして、トロトロの唾液に塗れている舌先を伸ばして絡ませ合う。

「れるお～～っ♡♡♡ じゅぷッ♡♡ れり” ゆりゆう” ～っ♡♡♡♡ はあ” ーっ♡♡♡ ぢゅぷぷう…っ♡♡♡」

蛞蝓同士の交尾のように舌と舌が密着したまま擦れあっており、卑猥な水音を立てながら唾液と唾液がニルニルと絡み合っている。唾液がブクブクと泡立つまで舌同士を絡ませているのだが、オルガマリーとマスターは濃厚な粘膜接触の快楽に蕩けながら唾液の飲ませ合いっこをして嚥下していた。

「ぢゅぷりゅりゅりゆう～～～っ♡♡♡♡ んく” ッ♡♡ ふう” ーっ♡♡♡ じゅずう” ……っ♡♡♡♡」

口端から唾液が溢れることさえ気にならない程にオルガマリーはディープキスに夢中になっており、逞しいマスターの胸板で『むにゅうっ♡♡』と押し潰れている乳房の谷間にポタポタと唾液の雫を滴らせている。そして、数分にも及ぶ長い愛情タップリのキスが終わり、ゆっくりと名残惜しそうに唇を離すと彼女の表情はトロトロに蕩けていた。

「ちゅぷぷう…っ♡♡♡ んむッ♡♡ ぷはあ” ーっ♡♡♡♡ はあ…っ♡♡ こっ、これで満足かしらっ♡♡♡ ふう” ーっ♡♡」

「はい、物凄く満足です。可愛いくてエロくて」

「えっ、エロ——っ♡♡♡？！♡♡♡ そっ、それより♡♡♡ いつまで抱き締めたままなの♡♡♡♡」

可愛くてエロいと言われた恥ずかしさを誤魔化そうとするオルガマリーは、口付けをしたのに抱き締められたままであることを抗議する。だが、キュッと括れている細腰に両腕を回して抱き締めているマスターは、両手を腰から更に下に伸ばしてモデルの如き美尻を撫でながら快感を与えるのであった。

けなどのスキンシップはしてきたのだが、更に”性”を感じる濃厚な肉体接触は初めての経験となるため彼女の動揺は凄まじい。

「嫌ですか？」

「いっ、嫌じゃないけどお……っ♡♡ んあ——っ♡♡♡ あっ♡♡ んひゅう～～っ♡♡♡♡♡」

「それなら良いじゃないですか」

「でっ、でもお……っ♡♡♡ おひっ♡♡♡ 心の準備があ♡♡♡♡ い`ひ——っ♡♡♡♡」

嫌という気持ちは一切無いのだが決心がつかないオルガマリーに対して、マスターはムッチリとした尻尾を鷲掴みにしながら揉みだき、彼女の下腹部に怒張している魔羅をズボン越しに押し当てたのである。

——グイっ♡♡♡

「お`っほお` おおお` お` ——っ♡♡♡♡♡♡♡ おっ、お腹に硬いのが当たってえ……っ♡♡ ん`ふう` ～～～っ♡♡♡♡♡」

「お尻を揉んでるだけでこんなに興奮してるよ。もっとマリーとエッチなことしたいって」

「んふう～～～～っ♡♡♡！！！！♡♡♡♡♡♡♡ グリグリお腹押さないでえ……っ♡♡ お`ひ——っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

オルガマリーの下腹部に逸物をグリグリと押し当てられてしまい、子宮を刺激されたことで余計にセックスを意識させられてしまう。快感と羞恥によって彼女の思考はグチャグチャになっているのだが、自分がお泊まりしますと口にするまでマスターが離してくれないことだけは漠然と理解していた。

「あっ♡♡♡♡ あっ♡ ああっ♡♡♡ だっ、だめえ……っ♡♡♡♡♡♡♡ こっ、これ以上されたら本当にい`っ♡♡♡ あ——っ♡♡♡♡♡♡♡」

お尻を揉みしだかれながら滑らかなお腹越しに子宮を刺激されてしまい、ゆっくりグツグツと煮詰められるように快楽は高まっていく。そして、マスターからの愛撫によってオルガマリーの快感は我慢する限界に達して、視界が真っ白な光に埋め尽くされながら意識が飛んでしまいそうな絶頂を迎えたのである。

——ぐにゅう` ～～～っ♡♡♡♡♡♡♡ ぐい——っ♡♡♡

「あ` ひい` いい` い` いい` いいい` い` ~~~~~っっッ` ♡♡♡♡ い……っ♡♡ イっ
くう~~~~っッ♡♡♡」

——ぶしゅっ♡♡♡ ぶしっ♡♡ ぶっしゅう` うう` う` ~~~~~っッ♡♡♡♡

驚掴みにされたままの桃尻をガクガクと嫌らしく揺らしながら、ショーツの内側で秘所から淫液をタップリと噴き出してしまふ。内股になっている足元には淫液の小さな水溜まりが出来上がっており、自分では体重を支えられなくなってマスターの両手と胸板に身体をグツタリと預けながらビクビクと震わせていた。

「イっちゃいましたね。それでお泊まりしますか？」

「はあ` ーっ♡♡♡ い` ひッ♡♡ ふう` ……っ♡♡♡♡ ——るっ♡♡ お泊まりするからあ……ッ♡♡♡」

「嬉しいです。それじゃあ……ベッドに行きましょうか」

「~~~~っっッ` ♡♡♡♡ はあ……っ♡♡」

抱っこするようにマスターに持ち上げられてしまふオルガマリーは、そのまま二人が愛し合う舞台となるベッドまで連れて行かれる。もっと深く愛されながら数え切れない位に絶頂させられてしまふと半ば確信している彼女は、火照った肢体をビクンッと震わせながら甘ったるい吐息を漏らしてしまふ。

オルガマリーとマスターが淫らな行為に耽っているベッドの周辺には、二人の着用していた衣服が乱雑に散らばっていた。裏地がオレンジ色をした黒いロングコートや真っ白なシャツ、タイ

トな黒スカートや白いラインの入ったオレンジ色のストッキングなど、先程まで着ていた衣服が脱ぎ捨てられているのが妙に生々しいエロスを感じさせる。

発情したメスの淫臭と蕩け切った嬌声に満たされる室内では、セックスを始めるための準備が進められていた。

「——えっ♡♡ シャワー浴びさせてえ……っ♡♡♡ い”ひい” いい” い” いい
”い~~~~っっ”♡♡♡♡」
「良い匂いだから大丈夫ですよ。もっとマリーのエロい匂い嗅がせて下さい。すうーっ」
「~~~~っっ”♡♡♡♡ だっ、だめえ”……っ♡♡ 嗅ぐなあッ♡♡♡ んひゅうう
うう~~~~っ♡♡♡♡」

既に二人が身に着けているのはショーツとパンツだけとなっており、ほぼ裸に近い露出をしている状態で肢体を重ね合わせていた。寝台の上で仰向けの体勢で寝転んでいるオルガマリーの上には、四つん這いのマスターが覆い被さっており、彼女の汗ばんでいる首筋に鼻先を押し当てながら匂いを嗅いでいる。

「すうーっ、はあ……っ。甘酸っぱくてエロい匂い、アソコが硬くなります」
「ふう”~~~~っ? !♡♡♡♡ あ”ひい” いいいい”い”~~~~っっ”♡♡♡」

オルガマリーがシャワーを浴びたりお風呂に入って身体を清めたりせずに淫らな行為が始まっているのだが、汗ばみしっとりとしたオルガマリーの抜群のプロポーションを誇るドスケベボディはマスターの両手で愛撫されていた。

きめ細やかな純白のモチ肌に充血した桜色の乳首が視線を惹き付け、指を広げた手の平から溢れてしまいそうなサイズをしながら形も美しい極上のおっぱいは、揉みしだかられながら乳首の先端をカリカリと指先で弄られている。また、非常にセクシーで大人なデザインをした真っ黒なショーツには愛液がタップリと染み込んでおり、薄布越しにオマンコの割れ目を指先で触れられながら上下になぞられていた。

——むぎゅう”うう”う~~~~っ♡♡♡♡ じゅぷっ♡♡ ずりゅう~~~~っ♡♡♡

「柔らかいおっぱいもびちゃびちゃのオマンコももっと気持ち良くしますよ。マリーは好きなだけ気持ち良くなって、何回でもイって良いですからね」

「ん”ひゅう”ううう”う”う~~~~っっ”♡♡♡♡ おっ、おっぱいとお……っ♡♡ あひっ♡♡ オマンコも一緒に弄っちゃダメえっ♡♡♡♡ あっ♡♡ くるっ♡♡♡ またくるう”~~~~っっ”♡♡♡♡」

愛撫によって分かったことだがオルガマリーは全身が敏感であり、乳房や秘所に至っては”クソ雑魚”と言って良い程に快楽に弱かった。芯から火照った身体と絶頂を重ねる度に彼女は敏感になっていき、クソ雑魚敏感おっぱいとクソ雑魚敏感オマンコを同時に弄られたことで簡単に絶頂を迎えてしまう。

押し寄せる快感の高まりと絶頂の荒波に抗うことも出来ず、オルガマリーは肢体をビクビクと痙攣させながら果てる。

「もう むりい” ～～っ♡♡ い” クい” くイク——っ♡♡ イっくう” うう” う” うう” う”
” うう” う” ～～～～～っっ” !!??♡♡♡♡♡♡」

——ぶっしゅー——っ♡♡♡♡♡ ♪しゅっ♡♡ ♪ぶっしゅーうううううううう
うう～～～っっ” ♪♡♡♡♡♡

「また潮吹いちゃいましたね。……これなら本番を始めても良さそうです」
「～～～っっ” ♪♡♡♡♡ い” ひっ♡♡ ひいーっ♡♡♡」

余りにも敏感で何度も潮を吹いている様子から前戯はもう十分だと判断したマスターは、オルガマリーの淫液がぐっしりと染み込むショーツを脱がせてしまう。絶頂の余韻から抜け出せないままである彼女に抵抗する手段は無く、しゅるりと足先からショーツが引き抜かれてビショビショのツルツルパイパンオマンコが丸見えとなった。

産毛すら生えていない秘所はまだ大人になっていない少女の秘所のようにあり、現在進行形で愛液をトプトプと溢れさせているスケベさがギャップになっている。

「マリーのオマンコ綺麗ですよ。ビチャビチャに濡れて凄くエッチです」
「やっ、やらあ～～っ♡♡ みっ、みないれえ……っ♡♡♡ んあ——っ♡♡」

視線だけで感じてしまうオルガマリーは、呂律の回らない口で見ちゃ駄目と懇願する。だが、そんな羞恥に染まっている姿さえドスケベであり、マスターの魔羅はパンツを突き破ってしまいそうな程に勃起していた。

「それじゃあ俺も脱ぎますよっ」

——ぐい……っ、ブルン——っっッ”！！！！♡♡♡♡♡♡

「——っッ？！！♡♡♡♡ ……あえッ♡♡♡ おッ♡ お……ッ、おっきい——ッ♡♡」

野球のバットをフルスイングしたかのような鈍い風切り音と共に姿を現したのは、オルガマリーの
前腕より遥かに太くて長い逸物であった。余りにも巨大で禍々しさすら感じられるデカ魔羅に
思考が追い付かいておらず、彼女はトパーズ色の瞳を見開いたまま口をパクパクさせて何とかおお
きいという言葉を押り出している。

ビクビクと震えている魔羅は長過ぎるため上下に撓っており、それが余計に重量感やサイズ感を
引き立てていた。

「これがマリーのナカに根本まで挿入いきますよ」

「ひッ、ひい……っッ”♡♡♡ そっ、そんなのお”ッ♡♡ はいらない”～～っ♡♡ あ
——ッ♡♡♡」

頭を左右にブンブンと振り乱すことで無理だと伝えようとするオルガマリーであったが、膝の
内側をマスターに触られてそのまま両脚を左右に広げられたら、それだけで快感が走って甘った
るいメスの声が漏れ出てしまう。彼は逃げられないようにするために脚の間に座り、下腹部の上
にガチガチに怒張した魔羅を乗せる。

「ほらっ、根元まで挿入いたら鳩尾まで届いちゃいますよ」

「お”～～～～っッ”？！！♡♡♡♡♡♡ むっ、むりい”～～っッ♡♡♡ ひぬっ
♡♡ ひんじゃう”——っ♡♡♡♡ お”ひッ？！！♡♡」

股下からお臍を余裕で超えて鳩尾にまで到達してしまう長魔羅が放っている熱気と存在感は凄
まじいのだが、規格外の大きさをした逸物に怯えてしまっているオルガマリーは秘所から許しを
懇願するようにフェロモン塗れの淫液を『ぴゅっ♡♡ ぷしゅッ♡♡』と噴き出していた。それが
余計にマスターの興奮と加虐心を煽ってしまうのだが、長大な逸物はドクンドクンと力強く脈を
打ちながら更に怒張している。

「大丈夫ですよ。本当に死んじゃうなら、それは気持ち良過ぎてですから。沢山愛してあげます
から」

「あッ♡♡♡ あっ♡♡ ああ……っ♡♡♡♡」

——ぢゅっぷうっ♡♡♡♡

「おっほおっ おおっ おっ ～っッ！！???♡♡♡♡」

絶対に逃げられないと理解したオルガマリーは声を漏らすことしか出来ず、そのまま怒張している魔羅の先端が濡れそぼった膣口に押し当てられた。握り拳のように巨大で硬くて、火傷してしまいそうな程の熱量を感じる亀頭、その感触や熱を膣口で感じただけで濁音に染まった嬌声が漏れてしまう。

「ゆっくり挿入れますよ」

「まっ、まっへえっ ……っ♡♡♡♡ こっ、心の準備があっ♡♡♡♡ んっ ひいっ ～っッッ
っ??!!!♡♡♡♡」

——ずぶぶうっ ～っッッ♡♡♡♡ にゅぶぶぶぶうっ♡♡♡♡ ブチッ♡♡♡♡ じゅぶるるるる
っうっ ～～～～っッッ♡♡♡♡

「おっ ヅぎゅうっ ……ッ?!!♡♡♡♡ おっ、大きくて太いのおっ ——っッ♡♡♡♡ んっ き
っ ゆうっ うううっ うっ う——っッッ♡♡♡♡ おっ ツ、おっ くっ までえっ ～っッ
♡♡♡♡」

「ぐっしょりトロトロのマリーのオマンコが、勃起したチンポに絡み付いてますよ。このまま奥まで挿入れますっ」

「ふぎゅうっ ううっ ううっ うっ うううっ うっ ～～～～～っッッ??!!!!♡♡♡♡♡♡」

処女特有の狭っこい肉孔に鈍槍の如き肉棒がズブズブと埋没していき、小指さえ挿入出来るか怪しかった膣孔が内側からミチミチと押し上げられてしまった。異物が侵入することを防ぐ処女膜も障子の張り紙のように容易く破られてしまい、長大なオチンポに肉穴を埋め尽くされながら野太い嬌声が漏れる。

肉体の防衛本能のようにヒクヒクしている尿道口から、『ぶしゅっ♡♡♡♡ ぷっしゅう♡♡♡♡』と潮を噴き出してしまう。

「ヌルヌルなのに入り口もナカも締め付けが強いっ。気を抜いたら射精しちゃいそうな位に気持ち良いですよ。でも、まだ半分も挿入いってないですから、このまま根元まで挿入れますよ——っッ!!」

——バチュンッ！！♡♡♡♡ ドチュっ！♡♡ パチュンッ！！！！♡♡♡

「おっ？！！♡♡♡ ドチ ユドチ ユっ♡♡ はげしい——っ♡♡♡ ちゅよし
“ ゆぎい” いい” いい” い” ~~~~っっ” ♡♡♡♡♡♡」

「これから毎日っ、何十回でもセックスしますよっ！！ 絶対に幸せにしますから——っ」

「ほぎゅっ？！！♡♡♡♡ おっほお” おお” お” ~~~っ” ♡♡♡♡ あ” く” めすり
“ ユっ♡♡ オチンポ深すぎり” ゆう” うう” う” うう” う” うう” う” ——っっ”
♡♡♡♡」

激しいピストンによってオルガマリーは絶対に覚えてはいけないアクメを覚え、マスターに愛されてハメ潰して貰えないと満足出来ないオチンポオナホなドスケベお嫁さんに躑けられる。力強く腰を叩き付けられる度に彼女は絶頂を迎えながら、更に深くて戻って来られないアクメが迫っていく。

——ドッチュンっ！！♡♡♡ バッチュンっ！！！！♡♡ パチュンっ！！♡ バチュ——っ
“！！！！♡♡♡♡

「精液が迫り上がってくる……っ。絶対に種付けしますっ！ マリーを子沢山なお嫁さんにしますから——っ！！」

「~~~~~っっ”！！？？♡♡♡♡♡♡ ほっ、ほんり” よにはらむっ♡♡ い” き
“ ユっ♡♡♡ およめさんになり” ゆう” うう” うう” う” う~~~~っっ♡♡♡♡」

性感の高まりに合わせてマスターのピストンは力強く激しくなり、度重なるピストンでオルガマリーは『ぷりゅんっ♡♡』と排卵してしまっていた。グツグツに煮え滾った特濃スペルマが競り上がって射精寸前となっていて、彼は何度も殴打した子宮口を強引に抉じ開けるかのように腰を全力で叩き付けたのである。

「だっ、射精すぞ……っ。孕めえ——っ！！」

——ドッチ ユンっっ”！！！！！！♡♡♡♡♡♡

「お” ——っ”？！！♡♡♡♡ お” まんご” イ” っグ” う” うう” う” うう” う” うう
“ う” ~~~~~っっ” ♡♡♡♡♡♡」

パンパンに張り詰めた亀頭によって子宮口は開かれながら、亀頭の先端からは放水のような勢いの吐精が行われた。家系コッテリラーメンのような濃厚さで黄ばんで見える白濁液が、オルガマリーの子宮や膈内を満たしていく。

—びゆるッ♡♡♡ びゆるるるるッ♡♡ ぶびゅッ♡♡ ぶびゅっ♡♡♡ ぶびゅびゅびゅ
びゅう”っ♡♡ びゅぶるるるるるるるう”っ♡♡♡ びゅぶッ♡♡ びゅぶう”ッ♡ びゅぶ
ぶぶぶぶぶぶぶう”ッ♡♡ びゆるるるるう”ッ♡♡ びゆるるッ♡ びゆるるるるるる
るう……っ♡♡♡ びゅぶぶぶぶう”っ♡♡♡ びゅぶッ♡♡ ……びゆるッ♡♡♡

「い”ッき”ゆ”う”～～っッ”♡♡♡♡ イ”ぎ”ゆイ”ぎ”ゆい”っき”ゆう”
——っッ”♡♡♡♡♡ はり”やむう”っ♡♡ あかちゃんはり”やむう”ううう”う”う
う”う”うう”う”～～～っ♡♡♡♡ イ”っグ”う”う”うう”う”うう”うう”う”う
”う”うう”う”———っッ”ッ”♡♡♡♡ イ”い”～～～～～～～～っッ”ッ”
♡♡♡♡」

—ぶっちゅんっ♡♡

「お”～～～っッ”??!!!♡♡♡♡」

規格外の大量射精により子宮内はタプタプに満たされることとなり、排卵していた卵子もスペルマの海で溺れながら蹂躞される。屈強な精子達が一つの卵に向かって群がるように突撃して結び付いた結果、マスターとオルガマリーの愛の結晶となる赤ちゃんを孕んでしまう。

「ふうーッ、愛してるよ」

「りっ、りっかあ……っ♡♡ わたしもお”ッ♡♡♡ あいひへるう”～～っ♡♡ んほお”
——っッ?!!♡♡♡」

精液だけでぽっこりとお腹が膨らみボテ腹となっているオルガマリーは、子作りエッチと種付けアクメの快楽に溺れながらマスターのお嫁さんとなった。その後もマイルームには愛し合う男女の声と淫音が響き続けることとなり、翌朝には彼の前でだけ素の自分を出して甘えてしまう彼女の姿が見られたのである。

「—責任取ってよねっ♡♡♡ 立香のお嫁さんにして貰うんだからっ♡♡」